

湊・舟、 そして湖底に沈んだ村

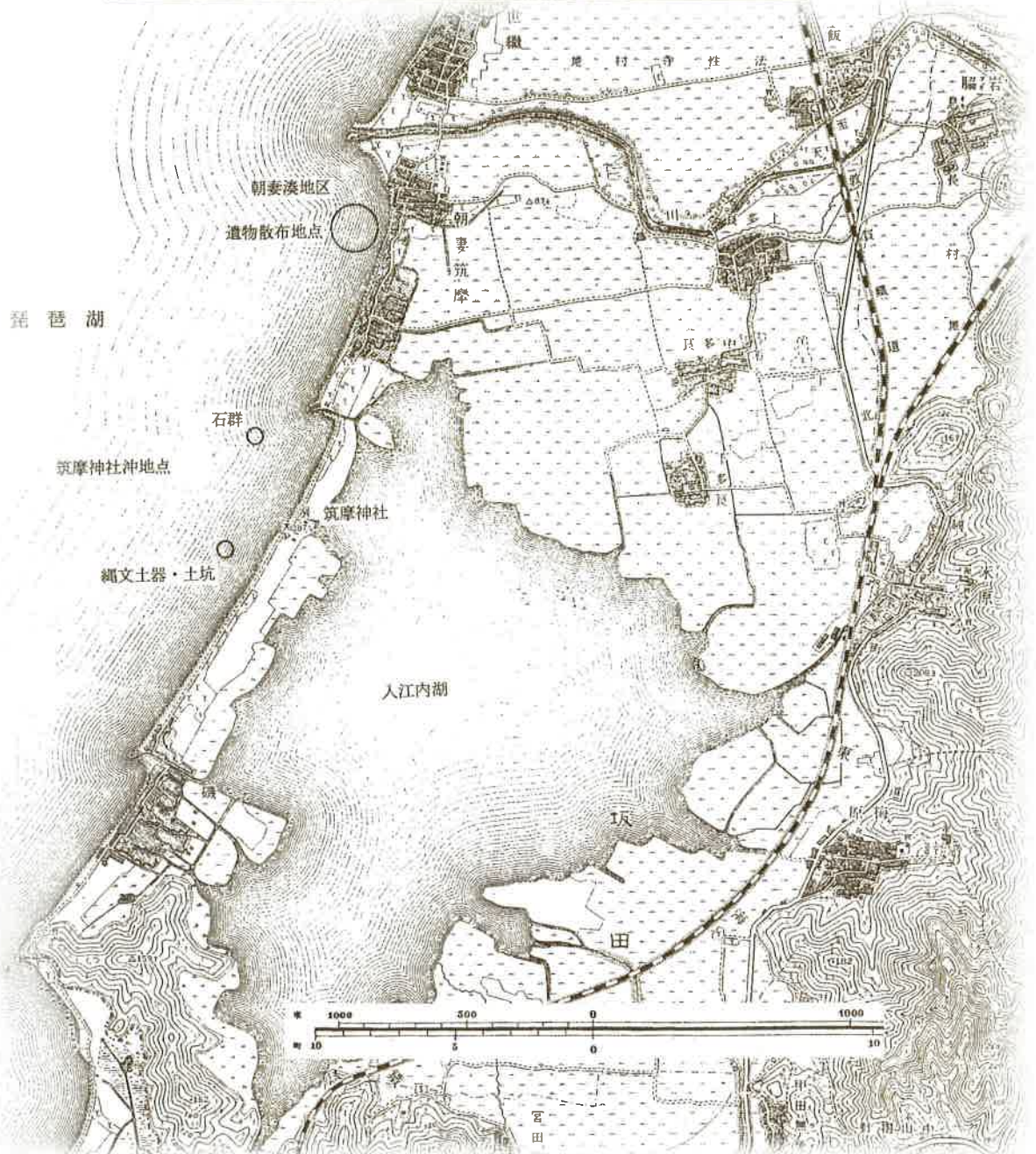
まいばら発、琵琶湖の水運・くらし1万年

米原市教育委員会
2009.3





入江内湖古写真
(大正14年頃)



明治時代の地形と尚江千軒調査地点(『尚江千軒遺跡』より)

琵琶湖

～まいばら発、水運・くらし1万年～

—琵琶湖は生活と生業の場であり、人と物が行き交った街道—

滋賀県米原市は、近畿と東海・北陸を結ぶ鉄道・道路網の結節点として発展してきました。しかし、その半面、縄文時代から1960年代まで連綿と続いた琵琶湖を利用した人のくらしや移動、物の輸送については歴史のなかに埋もれつつあります。

湖と人の歴史

昭和19年着工の干拓まで米原駅の西側に広がっていた琵琶湖第二の内湖「入江内湖」。その全域からは縄文時代早期の2体の人骨（磯山城遺跡）をはじめ、各時期の遺物が豊富に出土し、5艘の丸木舟がみつかっています。

かつて、琵琶湖と入江内湖のあいだには長大な浜堤が形成されていて、朝妻筑摩や磯の集落、筑摩神社はこの上に営まれていました。筑摩御厨遺跡の発掘では、平安時代の墨書土器や役所で使われる道具類が出土して、ここには、朝廷などへ食物を供給した宮内省大膳職の御厨が置かれていたようです。日本三大奇祭「鍋冠祭」はこれに由来します。そして、筑摩神社を中心にした琵琶湖の湖底には、大地震で水没した集落が眠っています。

人・物行き交う湖の道

天野川河口には、古代から琵琶湖有数の湊であり、おおくの文献に登場する朝妻湊がありました。近世には「彦根藩三湊」のひとつ米原湊が開かれます。東山道（中山道）の美濃方面の物資を坂本や大津、さらに京大阪へつなげる良港を抱え、畿内と東海との湖の結節点が米原です。

そして、湖岸の人々や漁師・船頭にとっては、まさに日常の生活と生業の場でした。

琵琶湖の船 ー丸木舟から丸子船へー

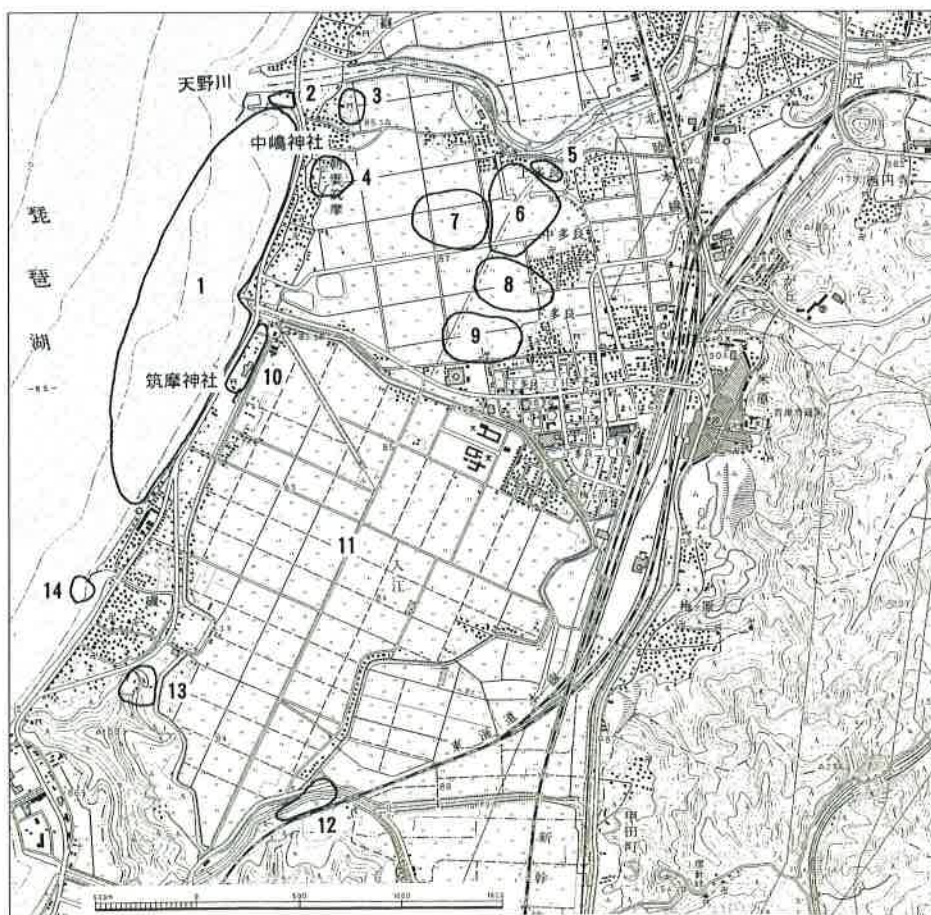
1) 縄文人の楽園・まいばら

入江内湖の縄文人は、丸木舟で内湖から琵琶湖に漕ぎだし、内湖背後の里山に入り、ときに天野川をさかのぼって伊吹・霊仙の深山に分け入りしました。琵琶湖、内湖、川、里山、深山が直結する米原の地は、県内でもいち早く開かれた場所で、磯山城遺跡(磯)、入江内湖遺跡(磯ほか)、法勝寺遺跡(高溝)など湖岸の遺跡では全時期を通じて土器や石器・木器などが出土しています。市内の縄文時代は、早期の中葉頃から本格的に始まります。姉川上流山間部でもわずかにこの時期の土器が見つっていますが、早期から前期、中期前半までは、筑摩佃遺跡(筑摩)、高溝遺跡(高溝)など琵琶湖岸が生活の拠点です。中期中頃以降、山麓や山間部、内陸部でも遺跡数が急増し、瀬戸内・東海・北陸・中部山岳地帯や関東など各地の土器が持ち込まれ、石剣や土偶といった精神的な遺物が出土するなど、後期前半までもっとも成熟した時期を迎えます。

晩期には、山麓で杉沢遺跡(杉沢)が栄えるものの、高溝遺跡、顔戸遺跡(顔戸)、世継遺跡(世継)など、湖岸の低湿地の自然堤防上に活動の場を移し稲作社会が到来します。



河童型土偶(筑摩佃遺跡/市指定)

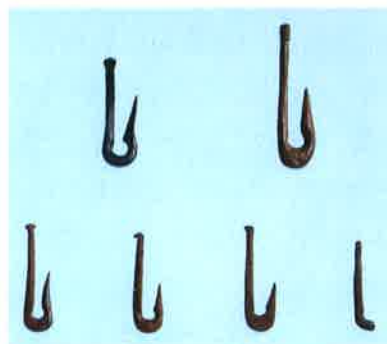


1. 尚江千軒遺跡
2. 朝妻湊遺跡
7. 筑摩佃遺跡
10. 筑摩御厨跡遺跡
11. 入江内湖遺跡
13. 磯山城遺跡
14. 磯湖底遺跡

湖岸地域の遺跡分布図(『尚江千軒遺跡』より)



縄文時代の人骨出土状況(磯山城遺跡)



釣り針
(入江内湖遺跡/滋賀県教育委員会提供)



漆塗容器出土状況
(入江内湖遺跡/滋賀県教育委員会提供)



縄文土器(磯山城遺跡)



鹿角製銛(入江内湖遺跡/滋賀県立琵琶湖文化館)



縄文土器(磯山城遺跡)

丸木舟

入江内湖遺跡からは、縄文時代前期前半(5号)、中期末～後期初頭(1～4号)の5艘の丸木舟がみつかっています。琵琶湖岸の遺跡では、尾上浜遺跡^{おのえはま}1艘(湖北町／後期)、松原内湖遺跡11艘(彦根市／後期～晩期)、長命寺湖底遺跡^{ちようめいじ}4艘(近江八幡市／晩期後半)、水荃^{すいけい}B・C遺跡7艘(近江八幡市／後期)など、30艘近く出土しており、なかでも入江内湖遺跡の5号丸木舟は全国で最古級の舟です。大きな身のセタシジミやたくさんの魚が生息する琵琶湖の恵みは、山の恵みとともに縄文人の生活を支えました。丸木舟は、琵琶湖での活動範囲を飛躍的に拡大させます。移動手段として漁業の場を拓いただけでなく、より多くの物資を運び、交流範囲を拡大して、人・物・情報のネットワークを形成し、縄文社会に大きな影響をもたらしました。



琵琶湖の丸木舟出土遺跡



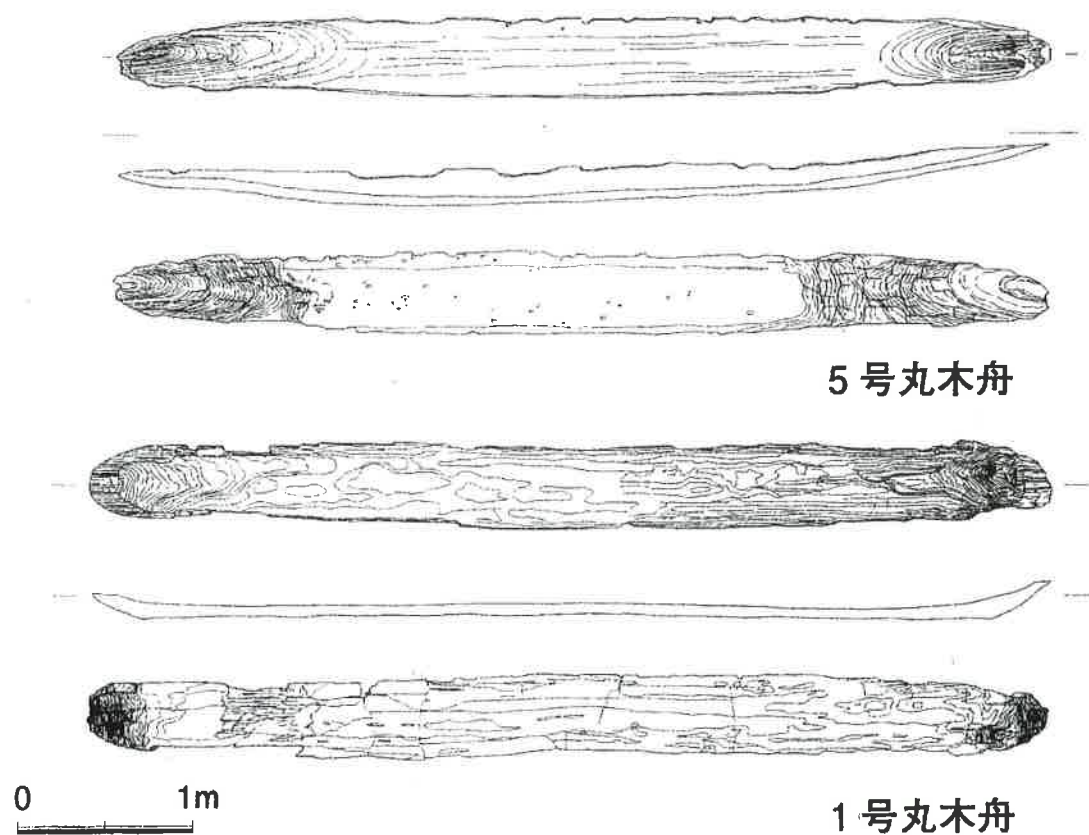
3号丸木舟出土状況



2号丸木舟出土状況



1号丸木舟出土状況



入江内湖遺跡丸木舟実測図（『丸木舟の時代』より）

前期の丸木舟(5号)は舟首・舟尾の平面形がV字に近く、裏面の縦断面が弧状になっています。中期末から後期初頭の舟(1～4号)は、舟首・舟尾がU字形で、裏面の底は平坦で、舟首・舟尾付近で強く屈曲します。

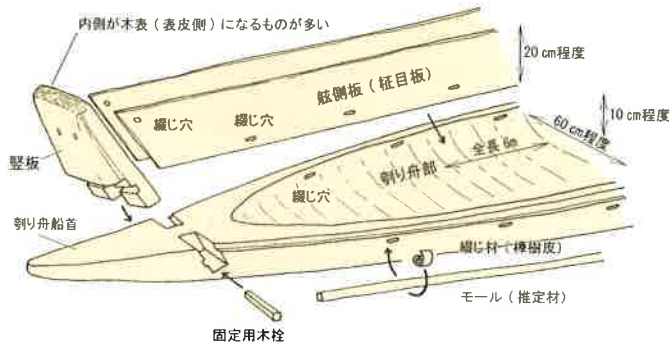


4号丸木舟出土状況



5号丸木舟出土状況（いずれも滋賀県教育委員会提供）

2) 丸木舟から丸子船へ



準構造船の構造(『丸木舟の時代』より)



準構造船形代(入江内湖遺跡/古墳時代前期)

琵琶湖の周りでは3世紀ごろからミニチュアの丸木舟が発見されます。船の安全や豊漁の祭りに使われた道具です。

この舟形の木製品は、舳に刻まれた波切板を装着する溝など、構造船を簡略な表現であらわしています。

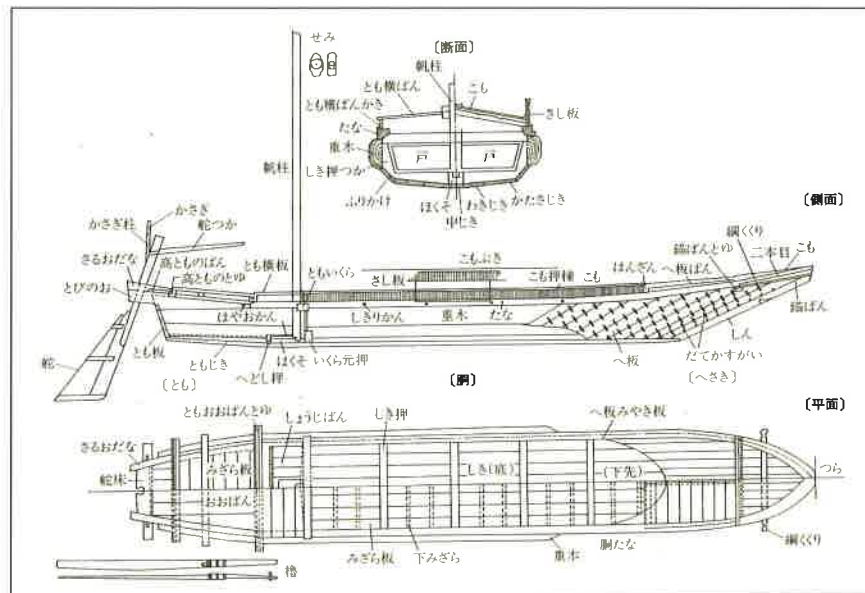


船形埴輪(粟東市新開4号墳/粟東歴史民俗博物館)

準構造船の実物資料の出土例は少なく、忠実に模倣したと考えられている船形埴輪が手掛かりとなります。この資料は、縦板が外されて船首・船尾が解放された新しい構造で、オールを漕ぐための突起が7対あり、漕ぎ手が坐る横板が渡してあります。



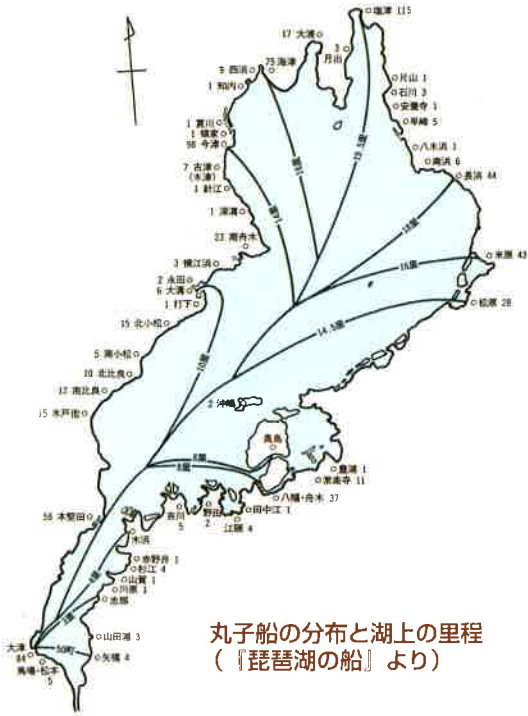
準構造船部材「縦板」(入江内湖遺跡)



丸子船の構造(『舟景の民俗』より)

丸木舟は、製作が簡単なうえ丈夫で長持ちすることから、つい最近まで使われていたことが、民俗事例で知られています。しかし、一本の木を削りだして作る丸木舟では、大きさや形に限界があります。弥生時代後期になって登場したのが、丸木舟を船底にしていくつかの部材を組み合わせ、加工を加えた「準構造船」です。船首・船尾に波切板（げんそくばん 縦板）、横に舷側板を立て、各部材をホゾと桜の樹皮等で結合しました。平底に近く積

載量が飛躍的に増大したほか、構造的な強靱さ、安定性、軽便さなど、利用性能が高い船です。古墳から出土する埴輪船はいずれも準構造船です。また、入江内湖遺跡からは船の部材が出土しており、きゅうぼうじ 縦板は約25~60cmを測ります。170cmの久宝寺遺跡（八尾市）出土品と比べるとかなり小型船です。近世になると、琵琶湖の運搬の主力は丸子船となり、最盛期には1300艘を超えたようです。いっぽうでは、ひらたぶね 周辺地域を結んだ艀船や、日常生活や水田に通うためのたぶね 田船などもみられました。琵琶湖の丸子船は、海に比べて浮力の少ない淡水域での、しかも南湖を中心とした浅水域での利用という風土を知り尽くした究極の姿だといわれています。



松原内湖の丸子船（明治38年／彦根市立図書館所蔵）

筑摩御厨と鍋冠祭

1) 筑摩御厨の役割

「御厨」とは、古代から中世にかけて、朝廷や有力社寺へ食物を調達する機関や場所をいいます。近江では瀬田・和邇(大津市)、筑摩に置かれました。筑摩御厨の最も古い文献は延暦19年(800)5月15日付け太政官符で(『類聚三代格』)、宮内省大膳職から内膳司に移管されたことが書かれています。その成立は奈良時代までさかのぼるようです。御厨推定地近くの湖岸の発掘調査では、小面積ながらたくさんの墨書土器が出土し、刀子(ナイフ、字を書く木の札を削る文具)、硯、緑釉陶器、皇朝十二銭のひとつ「神功開宝」など、8世紀末~9世紀(平安時代初期)の役所で使うような遺物が見つかり、筑摩御厨のものと判断されました。



墨書土器「月足」



雁股鎌・刀子



神功開宝



筑摩神社



鍋冠祭古写真

2) 奇祭・鍋冠祭 なべかむり

—近江なる 筑摩のまつり とくせなむ つれなき人の 鍋のかず見む—

『伊勢物語』に詠まれた筑摩の祭は、平安貴族にも広く知られていました。なべかままつり鍋釜祭といわれ、筑摩神社の春の祭礼として、毎年5月3日におこなわれます。鍋冠りは7~8才の少女8人が一閑張りの鍋や釜を冠り、かりぎぬ緑の狩衣にひ はかま緋の袴をつけた雅やかな姿で、湖北に春をつげます。筑摩神社の祭神に朝廷の大膳職が祀る御食津神があり、筑摩の神は食物の神です。鍋冠祭は、御厨のようすを映しだした姿といわれます。



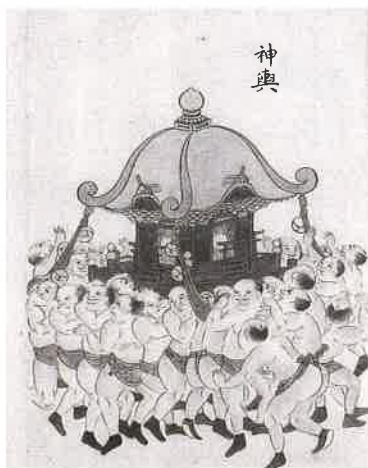
太鼓山



鍋冠祭 (筑摩神社)



太鼓山 (祭列図)



神輿 (祭列図)



祭行列図 (『筑摩字誌』より)

朝妻湊と米原湊

畿内と東国とを結ぶ湖上ルートは、天野川の河口に位置する朝妻湊が琵琶湖の入口です。隣接して筑摩御厨がひかえる古代以来の要港でした。江戸時代に入り米原湊が開設されるまで、東国・北国の玄関口として、湖上交通の要衝として栄えました。

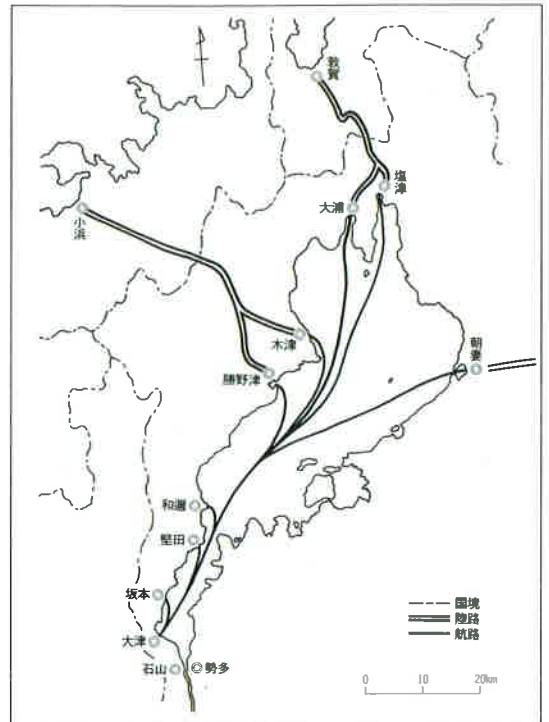
1) 朝妻湊—古代からの要港—

『万葉集』に「近江の海、八十の湊」と詠まれた琵琶湖のなかでも、朝妻湊は『延喜式』(927)に塩津(西浅井町)、海津・勝野(高島市)とともに公認港として記載されています。東山道・北陸道の接点にあり、湊の北を流れる天野川の舟運も利用できます。

その名は史料にも登場し、文明5年(1473)に前関白一条兼良が美濃に赴くとき、大津・坂本・堅田・八坂を経て朝妻で下船し東山道を利用しています(『藤川の記』)。天文2年(1533)、尾張から帰った山科言継は、朝妻湊を午前2時に出航し、午後5時に坂本に到着しました。

2) 米原湊—彦根三湊—

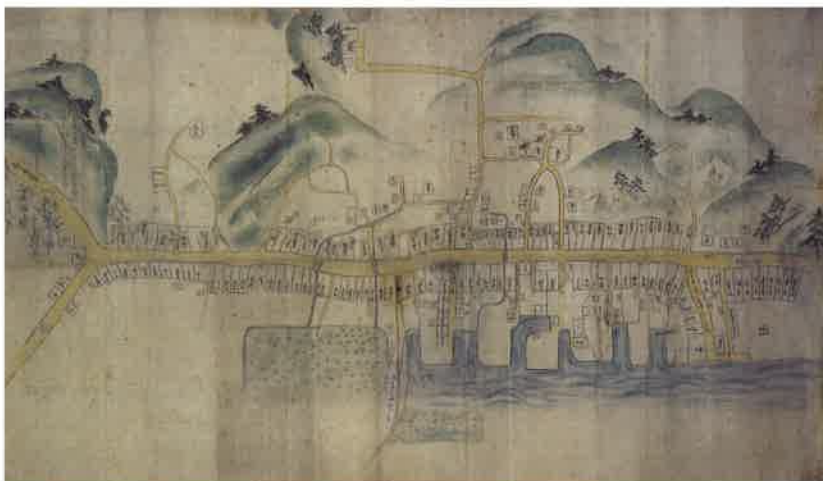
米原湊は朝妻湊の南に位置し、現在のJR米原駅付近にありました。中山道の番場宿へ通じる美濃路方面への物資輸送の拠点です。琵琶湖とは入江内湖を通じてつながっていましたが、昭和19年着工の内湖の干拓でその役目を閉じました。慶長8年(1603)、彦根藩の命で世継村の北村源十郎により開削されました。朝妻湊との争論を経て、長浜、松原(彦根市)とともに彦根三湊として栄えました。



古代の湖上運搬ルート(『琵琶湖の船』より)



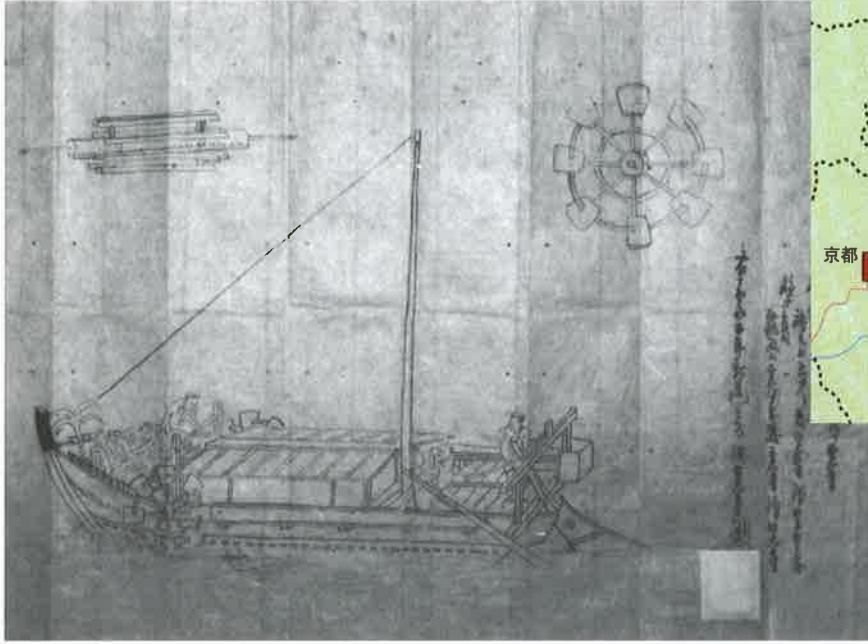
現在の朝妻湊付近



『米原宿絵図』(滋賀大学経済学部附属史料館)

北村源十郎家古写真
(滋賀大学経済学部附属史料館)

江戸時代、米原の本陣であった北村源十郎家は、荷物の運送を取り次ぐ船問屋を営む一方で、数艘の船を持つ船主でもありました。



「嘉永五年車早船新造図」(滋賀大学経済学部附属史料館)

くるまはやぶね
車早船とは、小型の丸子船の前方両側に車を付けた外輪船で、天候に左右されず、安定的に人を運ぶために考案されました。米原湊ではすくなくとも10年間航行していたようです。



江戸時代の琵琶湖の諸浦
(『湖幸比古と豊湖比咩の世界』より)



米原湊の現状



こんきまる
金亀丸(大津市歴史博物館)

明治2年(1869)一番丸が琵琶湖に就航してから、明治22年の東海道線全線開通まで、蒸気船が大量輸送の主役でした。三番目に就航した金亀丸は大津-米原間を結びました。

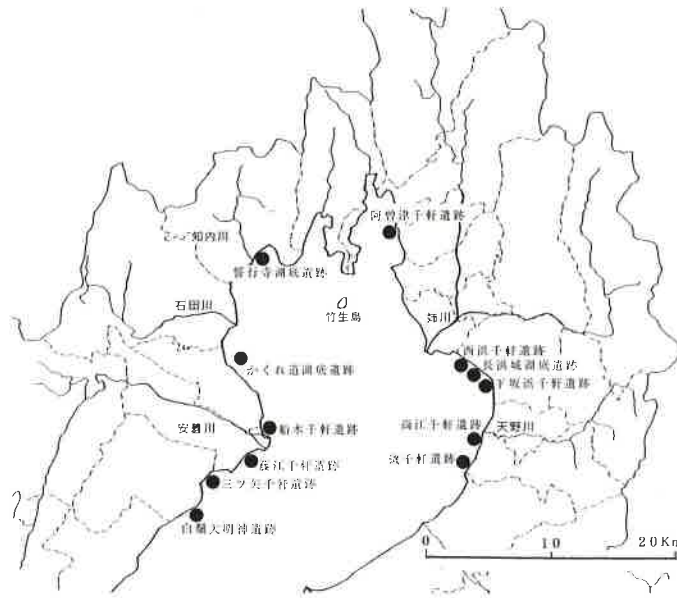


米原汽車汽船道道標

尚江千軒と琵琶湖の湖底遺跡

琵琶湖にある約90の湖底遺跡のうち、ある時、湖辺にあった村が突然湖底に没したと伝えられる「水没村伝承」や湖底に道があるなどの伝承をもつ湖底遺跡は約12カ所あります。

太古の時代、琵琶湖（古琵琶湖）は現在の三重県伊賀周辺や甲賀・日野・蒲生周辺などをさまよい、30~40万年前に現在の位置に落ち着き、1万数千年前にいまの姿になりました。その後も河川からの土砂や波の影響、人為的な埋め立てで湖岸線が変化してきました。とくに、唯一湖水を排出する瀬田川の流出量によって、湖水量や湖水面の高低がたびたび左右されましたが、現在は、南郷洗堰なんごうあらいせきによって水位（標高84.371m）が調整されています。



琵琶湖における水没村ほか伝承・口伝の湖底遺跡（『尚江千軒遺跡』より）

湖底に村が沈んだという伝承地は琵琶湖北湖の東西両岸に集中しています。その多くに、村の規模とは関係なく、水没伝承の表現として「千軒」が付けられています。



『南都興福寺派下近江國坂田郡筑摩社並七ヶ寺之繪圖』（筑摩神社蔵）

尚江千軒遺跡は米原市朝妻筑摩沖の湖底にあります。『近江国坂田郡誌』などに「かつて尚江と称する大村があったが、正中2年(1325)十月十一日の大地震のため、わずかな家を残し全部落が湖中に没した」とあります。また、筑摩神社には正応4年(1291)に描かれ、2回の模写を経て最後に江戸時代に写された絵図が伝えられています。



水没推定地

『絵図』には、筑摩神社から約六丁(654m)の馬場が湖岸の大鳥居まで延び、その南北には「神立」「西邑」の2集落が描かれていますが、現在ではいづれもみることができません。この部分が水没したと推定されています。



筑摩神社と神宮寺



入江内湖(筑摩江)

1) 尚江千軒遺跡の調査—滋賀県立大学林博通研究室—

筑摩神社には、絵図の内容によく符合する永禄10年(1567)成立の『筑摩大神之紀』があり、すでに湖岸の大鳥居が水没していることを記しています。この大鳥居などを求めておこなわれた水中考古学の調査では、朝妻湊跡沖の湖底で12世紀中葉を中心とする土師器皿・須恵器甕・山茶碗・常滑焼片口鉢などが多数発見されました。とくに軒平瓦は、尾張で製作され京都で使用されたもので、運搬途中に朝妻湊の一角にあったものが洪水などで湖底に運ばれたと推定され、東国から琵琶湖を経由する輸送ルートが明らかになりました。

筑摩神社沖では、7～8世紀の須恵器横瓶を共伴する石群が確認され、『絵図』にみえる湖岸に築造された横穴式石室墳と副葬品の可能性が指摘されています。また、粘土質の土層に人為的に掘りこまれた2基の土坑が確認され、検証の結果、これらの遺構は大地震などで一気に湖底に沈下した可能性が高いようです。集落そのものの遺構が見つかっていないため、まだまだ謎の多い湖底遺跡です。



軒平瓦・平瓦・丸瓦



調査風景 (須恵器取上)



須恵器横瓶



高杯・長頸壺 (採集品)



須恵器甕 (採集品)



常滑焼片口鉢・山茶碗(皿・碗)・土師皿



縄文土器



筑摩神社沖での調査 直下あたりに石群



調査風景



須恵器横瓶出土状況



五輪塔



調査風景



石群



湖底の土坑

※写真は滋賀県立大学提供

2) 琵琶湖の湖底遺跡—高島市三ツ矢千軒遺跡—

滋賀県立大学林博通研究室では、1997年から継続的に湖底遺跡の調査をされています。三ツ矢千軒遺跡は『高島郡誌』に、昔、湖辺の一部陸化した葭島より180mほど沖合に大三ツ矢村があり、湖底には石垣が100mも続き、石橋もあると記されています。調査の結果、現湖岸の沖合約50m付近から沖に向って約80m延び、先端で直角に曲がる、幅6～11.5mでカマボコ状の石塁が確認されました。石材には15世紀後半～16世紀頃作成の石仏や五輪塔が含まれていました。また、石塁から南東約160mの地点では、垂直に立つ角柱や人為的に打ち込まれた木杭、立木根、石列が集中し、湖底から湖岸にかけて古代～近世の土器片が多く散布していました。遺構の内容や角材などの年代測定の時期にばらつきがあるものの、大三ツ矢村の可能性のある遺構が湖底に存在するようです。古絵図の検討から元禄元年(1688)以前に地震動による地盤沈下で水没したことが指摘されています。

湖底遺跡の針江浜遺跡(高島市)では、弥生時代中期の大地震の亀裂と液状化現象の「噴砂」の跡が見つっています。



角柱出土状況 (滋賀県立大学提供)



地震による噴砂検出状況 (針江浜遺跡/滋賀県教育委員会提供)



湖底の石仏 (滋賀県立大学提供)



出土遺物 (近世)



出土遺物 (古代)



湖底の石塁 (滋賀県立大学提供)



鹿角製戈

入江内湖遺跡出土遺物

(木製品以外は干拓資料館)

入江内湖の干拓時に、各時代の土器が多量に採集されました。なかには朝鮮半島からもたらされたとみられる陶質土器の蓋・長頸壺があります。



高杯蓋



墨書土器「錦谷」



長頸壺



木製品

【主な参考文献】

- 秋田裕毅1997『びわ湖湖底遺跡の謎 琵琶湖一万年の水位変動』
 - 安土城考古博物館2006『丸木舟の時代—びわ湖と古代人—』
 - 安土城考古博物館1997『物と人 古墳時代の生産と運搬』
 - 大津市歴史博物館1993『琵琶湖の船 丸木舟から蒸気船へ』
 - 滋賀県教育委員会他2008『近江湖物語2 湖幸比古と豊湖比咩の世界』
 - 滋賀県立大学林博通研究室編『尚江千軒遺跡 琵琶湖湖底遺跡の調査』
 - 滋賀大学経済学部附属史料館1998『江戸時代の米原湊』
 - 出口晶子1997『舟景の民俗 水辺のモノグラフィ・琵琶湖』
 - 彦根城博物館1999『湖上水運の盛衰と彦根三湊』
 - 琵琶湖博物館1999『湖の船 木造船に見る知恵と工夫』
 - 用田政晴1999『信長 船づくりの誤算—湖上交通史の再検討—』
 - 用田政晴2007『琵琶湖をめぐる古墳と古墳群』
- ※論文等については割愛させていただきました。



【協力機関・協力者（敬称略）】

林 博通・用田政晴・寿福 滋
大津市歴史博物館・干拓資料館・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館
滋賀県立大学・滋賀県立琵琶湖博物館・滋賀県立琵琶湖文化館・滋賀大学経済学部附属史料館
高島市高島歴史民俗資料館・筑摩区・筑摩神社・彦根市立図書館・栗東市立栗東歴史民俗博物館

湊・舟、そして湖底に沈んだ村 ～まいばら発、琵琶湖の水運・暮らし1万年～ 2009.3.1

米原市教育委員会 〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206 TEL.0749-55-8106 FAX.0749-55-4040